中学校の IB 教育の環境下における援助ニーズと
インクルーシブ教育
―帰国子女および外国籍生徒を中心に―

学籍番号　　199210
氏　　名　　小林　信之
主指導教員　　柿　慶子

１．実習校における教育の現状と課題及び研究の目的

通常学級における少人数の帰国子女生徒や外国籍生徒は，特別支援学校・学級の対象とされてきた障害を持つ子どもや，学習困難・行動問題をもつ子どもと違い，特別に援助する対象と見なされにくい．なぜなら，1 校あたりの当該生徒の人数の少なさや，海外での適応経験があるので自らなじめる，あるいは，海外の生活経験があったり，マルチリンガルである＝優秀といった先入観を持たれ，援助の手が届きにくいからである．

A 校は国際化社会に対応できる人間の育成を目指し，帰国子女（日本国籍）と外国籍生徒からなる「国際枠」を X-17 年度から設けている．また国際バカロレア中等教育プログラム(MYP)を行う IB ワールドスクールの候補校として，認定を目指してきた．

しかし，X 年 2 月の認定訪問では不認定となった．理由の一つとして，「学校は，ＩＢが求めるインクルーシブ教育について方針を出しているが，実際は実践の中で特別な教育ニーズを必要とする生徒に対して，サポートを行っていない．教員はこの方針を認容せず，トレーニングもしていない．それを行う役割も知らない．教員とサポートスタッフは特別支援ポリシーを知らずそれを行う役割も知らない.」「学校は，学習の特別支援教育の必要な生徒を受け入れていない.」といった指摘を受けた．

A 校は選抜検査を経て生徒が入学するため，学力的な困難を抱えた生徒は少ない．また，不登校などの課題を抱える生徒も少ない．

そこで，A 校における特別援助の対象を「国際枠生徒」と定め，援助の実践を行うことで IB ワールドスクールの認定を目指し，認定校となることでさらに増加する国際枠生徒への適切な援助を行うためのエビデンスとなるべく，調査に基づいた実践を展開した．

近年，外国人労働者の増加により，公立学校における外国籍生徒は増加の一途をたどっている．本研究において帰国子女生徒や外国籍生徒の適応までの過程と援助ニーズを明らかにすることは，公教育における実践的知見の解明に寄与するものと考える．

２．学校実習における実践内容と研究の結果

援助ニーズを探索するにあたり，まず他附属学校の国際学級の運営実態を調査した．そ

の結果，A 校の国際学級の在り方は，いずれの附属学校のものとも異なるユニークなもので，学級体制の変更が課題の改善につながるかは未知数であることが分かった．

次に，国際枠生徒に，A 校への入学以降の適応過程と現在抱える援助ニーズについてインタビュー調査を行った．分析の結果，現地校やインター校の小学校段階では未履修である「理科社会への不安感」や「非英語圏からの帰国であるのにも関わらず，一般生徒から英語が得意であるかのように思われることへのプレッシャー」，「進路への不安」といった課題を抱えていることが明らかになった．

それらのニーズへの援助として，まず，理科・社会をどのような形で学習支援するのか検討し，A 校生徒が 1 人 1 台所持している ICT 機器を用いた学習支援の可能性を探索した．また，日本語を母語としない外国籍生徒は問題を解く力はあるものの，設問や問題文の読み取りに時間がかかり，問題が解けないことがある．そこで，生徒の読書速度を向上させる援助として，文字認識に困難のある人でも読みやすいとされる UD フォントと明朝体の可読速度を比較し，読む速度を上げることができるか測定を行った．その結果，UD フォントによって文章をより速く読んでいる現象に有意傾向があることが分かった．

次に，国際枠生徒は既に被援助の実感を持ち，それが適応に際し効果的であったと認識していたので，国際学級担任に，自らの援助についてインタビュー調査を行った．分析の結果，国際学級担任は常に観察による「アセスメント」をとりながら国際枠生徒の「忙しさ」を気にかけており，その心理的負担を軽減するために，普段の生活の中で「話を聞くこと・語らせること・クラスの話題の中心に導くこと」を心がけていることが分かった．

最後に，継続的な「話を聞く」という援助の実行，およびコロナ禍における生徒の援助ニーズの探索のため，再度国際枠生徒にインタビュー調査を行った．

生徒は，コロナ禍による長期休校を経て，現在の状況に対し「非常な忙しさ」を感じ，また「先の見えない不安」を抱えていることが分かった．それは主に進路に対してであり，休校による学習の遅れとその揺り戻しによる授業数・課題の増加や進路に関してすべてが白紙になってしまったことにより，心身の余裕が失われ，疲労していた．

そこで，進路の保障のために附属高校への連絡進学の拡大と迅速で丁寧で分かりやすい進路情報の発信に取り組んだ．その結果，国際枠生徒を含め，例年よりも多くの生徒の附属高校への連絡進学を実現することができ，外部の高校を国際入試制度で受験する生徒を含め，全ての国際枠生徒が希望する進路を確保することができた．

３．総合考察

生徒のニーズは常に変容しつづけ，一定ではない．探索した援助ニーズも，その分析が終了した頃には既に生徒たちの中では解決している可能性もある．

そのような日々変化する援助ニーズや生徒の実態に教員として接しながら，実践の中に研究を位置づけられた．今回行った，調査のエビデンスに基づく援助を今後も継続しながら，常に生徒の援助ニーズを探索することが必要であると考える。